今更ながらのシチュエーション

美憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今更ながらのシチュエーション

【Ｎコード】
Ｎ１７２４Ｑ

【作者名】
美憂

【あらすじ】
あたしと「あいつ」の大人だから照れくさい、大人だけど少しピュアな恋のお話。

プロローグ

「さすがにヤバイでしょ。」
ため息を一つつくと、冷め切ったカフェオレを飲み干してあたしは呟いた。
最近独り言が増えたな、なんて思いながら煙草を取り出してくわえた所でまたため息一つ。

これもヤバイよな。
確実に最近煙草の本数が増えてる。
これじゃ禁煙なんてとんでもないってお話でしょ。
まあ、煙草やめる気なんてさらさらないんだけど。

どれもこれもあいつのせいだ。
完全な責任転換。だけど。
あたしのため息の理由は、絶対にあいつのせいなのだ。

ああ。もうやめよう。
考えても仕方のないことは考えても仕方がないのだ。当たり前だけど。

そしてあたしは本日１０何本目かの煙草に火をつけた。

これでまた煙にごまかしてため息をつく。
煙草一本分で約６回のため息。
ため息一回で一つ幸せが逃げるのなら、あたしは一日に何十個の幸せ逃がしてるんだろうね。

はあ。まいったな。

あいつ・・・と言うのはうちの会社の濱本史人の事だ。
あたしと同じ年の男で、去年から営業２課の同僚で、友達で、そして。
そして・・・なんだろ。
そして「夢見がちなトラブルメーカー」

はんっ。こんなキャッチフレーズが似合うのは２５歳までだろ。
３０過ぎたようないい大人のキャッチフレーズじゃないが、本当にこいつは「夢見がちなトラブルメーカー」なのだ。

そしてあたしは。
そんな「トラブルメーカー」に引っ張りまわされてるってわけ。

そして今朝も・・・あいつはやらかしてくれたって訳だ。

「澤木さん！濱本から連絡はないのか？」
朝礼後のこと。兼田部長が見積もりを作ろうかとＰＣを立ち上げているあたしのデスクに来て言った。

ああ。そう言えば出社してないわね。
あたしは、目の前の濱本のデスクを見ながらのんびりと思った。

だって昨日寝たの３時なんだもん。眠いし。
だいたい、今日はまだあたし会社の電話に一本も出てないぞ。

「知りませんけど・・・会社に連絡ないんですか？」

「無いから聞いてるんだ!澤木さんに連絡来てないか?個・人・的・に」
兼田部長は大きな声をさらに大きくして言った。

わざわざ「個・人・的・に」って言う区切りに嫌味を感じるのは何故だ。
こういうわかりやすい嫌味には気がつかない振りをするのが賢明だわ。

「会社に来てない連絡が、どうして私に来るんですか。知りませんよ。」
兼田部長はじろりとあたしを見ながら。
「澤木さんは濱本と仲良しぃ~だからな。知ってるかと思ってな。」

はんっ。嫌な言い方。
何が「仲良しぃ~」だ。そんなの４５才のおじさんが言ってもかわいくないってーの。

あたしが冷たい目で見ながら
「知りません。」
と言うと兼田部長は
「なんか連絡あったら俺に連絡しろといってくれ。」
とだけ言って席へ帰っていった。

それにしても。
濱本の奴~とうとう無断欠勤しやがって。

あたしは携帯をジャケットのポケットに入れて立ち上がった。

お手洗いへ。

部長があたしのほうを見ていたのは、しっかり把握しながら。

着信

「今日はおやすみですか?ご体調でも悪いのかな?」
お手洗いの個室へ入ると、あたしは濱本にメールを送った。
本当は「何やってんだ!連絡ぐらいしろ!」って送ってやりたいところだが。

ほら大人だから。
会社に私情を持ち込んじゃいけないわ。

大人になれない兼田部長みたいなのもいらっしゃるけどね。うふ。

と。
あたしの手の中で携帯が青く光りながら震えた。

サブディスプレイに表示される「着信中」それに続く見知らぬ番号。

馬鹿っ!今お手洗いだぞっ!
誰か知らないけど場所考えて電話して来いよ。

なんて無茶なこと思いながら、お客様かもしれないと電話を取る。

「・・・はい澤木です。」
「・・・」
「もしもし?澤木ですが・・・?」

「・・・あ~俺。」

は、濱本っ!!!

と叫びそうになって、ここは会社のお手洗いだと気付く。

つか、「あ～俺」って何よ。何そののどかな感じは。

「・・・濱本何やってんのよ。つかなんで無断なわけ?で、何この電話番号」

ひそひそ声で、それでも矢継ぎ早に尋ねるあたし。

「あ～え～と、これは連れんちの電話。」

いや。そうじゃなくて。大事なのはその前の質問だろ。

ああ。それよりも。

「今ゆっくり話せる状況じゃないの。１０分後にもう一回電話して。」

なんたってここはトイレの個室だ。

「ああ。了解。んじゃ。」

あたしはトイレを出るとデスクに戻り、鞄とコートを引っつかむと「お客様の所へ行ってきます!」と会社を飛び出した。

・・・あ。ホワイトボードに行き先書くの忘れた・・・。

１０分後。

再び「連れんちの電話」から着信が入った。

「はい。」
「あ～俺。なにさっきは事務所だったの？」
相変わらずのんびりしてやがる。
「今日は平日なので普通は会社にいますね。つか、君は何で来てないの？」
あたしはとりあえず地下鉄の駅へ向かいながら尋ねた。
「あ～っと、それを話すと長くなるよ？」
「会社には連絡したの？」
「してない。」
あたしに電話できるんなら会社に先にしろよ。
「兼田部長が連絡しろって」
「ん～後でする」
後にする意味がわかんないんですけど。
「で、あたしへのご用はなに？」
「ご用って言うか・・・澤木さんこの後客と約束はある？」
「時間決めた約束は無いけど？」
営業には決めた約束は無い日もあるのだ。あたしが出来ない営業だからじゃないぞ。
「んじゃ、俺と会おうよ」

・・・はい？

「３０分か１時間で行けるからデフェールで待っててくれよ。」

デフェールはあたしが営業の合間に一服するカフェだ。あたしの隠れ家。

濱本も何回か一緒にサボ・・・じゃなくて休憩した事がある。

「なんで？」

地下鉄の入り口に着いたところで立ち止まる。ここの階段は電波が悪いから。

「詳しくはそのときに話すからさ。」

「わかった。んで、何で連れんちの電話なの？」

後で聞けばいいのにあたしはつい尋ねた。

でも、聞いておいて良かった。

「あ～俺ね、携帯ぶん投げて壊れちゃったんだよね。」

ええ～～～～～～～っ？

「んじゃ、後ほど。」

ぷち。驚いて二の句も告げなくなったあたしとは裏腹に、濱本はのんびりとそう言うと電話を切った。

携帯ぶん投げて壊したってどういう状況よ～～～？

そして。あたしはデフェールで濱本を待ってるって訳。

かれこれ1時間半は経った。カフェオレは飲みきっちゃったし、いつになった来るのか聞きたいとこだけど。
携帯壊した（壊れたんじゃないだろ）相手に聞くことも出来やしない。

携帯持ってなかった頃の待ち合わせってこんなのだったな、なんて思いながら。
あたしは咥えた煙草に火をつけた。

そしてまた深いため息を煙と一緒に吐き出した時。

「おまたせ～」

濱本が現れた。

理由

「おまたせ～」

そういって現れた濱本は、ニットキャップにダウンジャケット姿。
こんな格好初めて見たわ。いつもはもちろんスーツ姿しか知らない。
それに・・・。

「あれ？眼鏡が違うじゃん。」
「ああ。これはプライベート用。」

眼鏡にビジネス用とプライベート用があるのか。
確かにいつものシルバーの眼鏡は「出来そう」な感じに見えるけど、
今日の茶色のセルフレームは「優しそう」に見えるな。あくまでど
ちらも見えるだけ、だけどね。

「で。会社には連絡したの？」
「いや、まだ。」

濱本にオーダーを取りに来た女の子に、カフェオレのお代わりを注
文してから、あたしは尋ねた。

「何であたしに先に電話してくるかな」
「ああ。それはね。」

濱本の眼鏡の奥の目がかすかに微笑う。

「澪ちゃんが心配してるかなぁって思って。」

こ、こういう時だけ「澪ちゃん」って呼ぶのは辞めろ。
そして、そうやって覗き込むのはやめなさいっ。

見慣れないセルフレーム越しの目に、なんだが目が合わせらんないよ。
ラフな格好にいつもと違う眼鏡が、まるではじめましての人みたいで。
はう・・・なに緊張してんだ、あたし。

「心配するもなにも君がいないことに気付いてなかったよ。」
「なんだよ。冷てーなぁ。」
「冷たい人が1時間半も待ってないでしょ。んで、何があった?」
「何って・・・」

濱本は運ばれてきたアイスティーをかき混ぜながら話し始めた。
カランカランとグラスに氷の当たるあたしの好きな音がする。

あたしと濱本が所属している営業2課には川原という課長がいる。
あたしたちの直属の上司だ。
まあ上司ではあるが、年齢はあたしたちより3つ下になる。
その川原課長が事の発端らしい。

「川原にはもう耐えられねぇ。会社って数字が出来てたらオッケーなのか?」
「まぁ・・・そうだろうね。」
「人格的に問題があっても?」
「あっても。」
「だってよ~川原の小林さんに対する態度は許せねぇよ。」

小林さんというのは営業2課の中では一番の年長の営業マン。正直

な所、この人良く営業やってるなって思うぐらい大人しいおじさんだ。まあとんでもなく営業成績はよろしくない。
あたしたちも「よろしい方」ではないけど。

川原課長はイケイケの営業マンタイプなので、小林さんみたいなタイプはいらいらするらしく何かというと当たっている。それについて濱本がむかついていたのも知ってる。

「だけどそれが君の無断欠勤とどう繋がるわけ?」
「・・・ストライキだ。」

はあ?すとらいき??

なんだか誇らしげな濱本の顔を、ぽかんと見ながらあたしは言った。

「馬鹿?」
「何で馬鹿なんだよっ!」
「んじゃ、ガキ。君がそんなことして何になるのよ。」
「だってさー聞いてくれよ。」

出たよ。濱本お得意の「聞いてくれよ」

同僚になって1年、何回濱本に「聞いてくれよ」といわれいろんな話を聞いてきただろう。
まるで学校から帰ってきた小学生の男の子が母親に話すみたいに、濱本は何でもあたしに話す。
自分が上手くやった契約の話から、見積もりの内容、客に怒られた話。
下手するとこいつの営業日報にも書いてないことまで、あたしのほうが詳しいかも。

「川原の奴、小林さんを苛めて辞めさせる気なんだぜ。」
「辞めさせる？」
嫌いだから辞めさせたいってわけ？
「川原の奴、あることないこと小林さんに言って怒鳴り散らしたらしい。それも、自分だけじゃなくて他の人間も小林さんのこと迷惑に思ってるとか言ったらしいんだ。俺の名前も出したらしい。んで、小林さんがいるせいで課の成績が下がってるとか、いなきゃ清々するとか言ったんだよ。昨日夜ね、小林さんから電話があったんだ。今まで迷惑かけてきたねすまないって。」
「ええっ？」
あたしは持ってたカップを口へ運ぶ途中で止まったままになってしまった。
川原課長が小林さんを嫌ってるんだなってことはわかってた。
いつも朝礼の後、小林さんが毎日課長の席の前に立たされてグチグチ言われてるのも見てる。
営業の其々の課の目標数字は所属人数によって決まるから、達成できない人がいるとお荷物になることも確かに間違いじゃない。
でも、だからといって言って良い事と悪い事がある。
少なくともあたしも濱本も小林さんを迷惑だと思ったことは無い。
濱本は入社してきてすぐに小林さんにいろいろ教えてもらったこともあって、逆に信頼しているくらいなのだ。
小林さんは大人しくて成績はぱっとしないが、事務処理は完璧だし

とてもまじめな人だ。

「な?俺が怒るのもわかるだろ?」

止まってしまったあたしを、さらに覗き込んで濱本が言った。

「気持ちはわかるよ。」

あたしがそういうと、濱本はだろ?というように笑った。

「でもさ。・・・やり方が下手すぎる。」

「下手?」

「そう。君が言う所のストライキをして、どう状況は変わるって言うの?」

濱本の笑顔は変わらないが、目は笑わなくなった。

こいつがこんな表情をするときは、明らかに納得してないって事だな。

「少なくとも、川原のやってることに俺が不満だってことは表明できる。」

「誰に?」

「え?」

「だから誰に対して表明できるの?」

今度は濱本の時間が止まった。口元にだけ薄っぺらな笑顔を残したまま。

「誰にって・・・。」

「多分それって、濱本の自己満足なんじゃないかな。あのね、濱本が無断欠勤した影響って、あたしが兼田部長に意味深なこと言われたのと、あとは濱本の業務査定が落ちたこと。」

「俺の業務査定はどうでもいいけど、澪ちゃんなんか言われたの?」

こいつはそういう奴なんだよなぁ。自分はどうでも良いけど人は心配って。

濱本が小林さんの為に怒りまくってるのはすごくわかるんだ。馬鹿なくらい人の事で怒ってるのはしょっちゅうだ。だけど。だからこそやり方が上手くない。

「あたしもどうでもいいのね。んで、もう一つの影響は。」

今度はあたしが濱本を覗き込む。

「君が来ないことで川原課長が小林さんに『濱本のやる気もお荷物がいりゃぁなくなるわなぁ』って愚痴ったこと。」

濱本の目に怒りが宿ったのがわかる。

いつもうっすら笑ってて、表情の読めない目だけど。これぐらい近けりゃさすがに感じる。

「まじで？」

あたしはこっくりと頷いた。

朝礼後に見かけた風景。

濱本の話を聞くまではいつもの意地悪だと思っていたけど、昨日小林さんにそんなことがあったのなら。

小林さんはもっと重く受け止めてたに違いない。まじめな人だもの。

「あ～～～」

濱本は頬杖付いてた右手で顔を覆うと唸り始めた。

「俺って結局から回りじゃん。ほんと馬鹿みてぇ俺。」

ふっ。なんかこいつ・・・可愛いな。

ふっと思ってその感情にあたしは驚く。

可愛いって!!!それなんか立場逆じゃん!!つか、こいついい年のおっさんだし。

いや。おっさんってことはあたしはおばさんって事になるわけで。

嫌だ。それは嫌だ。

ああ。そんなこと今はどうでもいいんだけど。

「空回りでも良いじゃん。濱本みたいに人の為に怒れるってすげーと思うよ?」

・・・だからそんなに落ち込むな、と。

大きくて長い指に隠れた濱本の目をさらに覗き込んだその時。

「すげぇ?」

濱本が右手を顔からはずした。

近いしっ!なんかすげー近いしっ!

こいつなんか無駄に睫ながいしっ!今関係ないけどっ。

「う、うん。すげー良いと思うよ。」

すると、濱本の目が笑った。ああ、こんな目をしていたのか、こいつ。

「でも、馬鹿って言ったの澪ちゃんだし？」

いや。そうだけどさ。

「やり方が下手って言ったんだよ」

「馬鹿も言ったじゃん。」

「言った。」

「ひでぇ。」

そして濱本はもう一度はじけるように笑った。

「ま。ありがとな。」

なんかわかんないけどお礼を言われて、あたしはやっと濱本の目の中の怒りが消えたことを知った。

そして。

「感謝は誠意で示してね？」

「誠意・・・体で払えって事？」

ちがうっ！！そんなことは言ってないっ！

破壊

「で、無断欠勤の理由はわかったけど。」

あえて「体で払う」はスルーしてあたしは話を続けた。

体で払うってなんだよ。それなら部屋の大掃除でもさせるぞ。

・・・何か違う気はしないでもないが。

「携帯君をぶっ壊したっていうのは何？」

「ぶっ壊したんじゃなくて、ぶん投げたら壊れた。」

濱本は何かを投げる動作をすると両手を開いて見せた。

「ぱあんって」

「それは壊れたんじゃなくて、壊したって言うの。」

「そうとも言うね。」

そうとしかいわねぇよ。

「・・・聞きたい？」

「聞きたくないような気がする。聞いてしまうと、また何か巻き込まれそうだ。」

あたしがそう答えると、濱本は悪戯っぽく笑った。

さっきへこんだカラスがもう笑うのか。

「聞きたいくせに。素直じゃないなぁ澪ちゃん」

「君が言いたいんでしょ？んで、何？」

ああ。こうやって聞いてしまうのが、あたしの悪い癖だ。
ほっとけないんだよな。どうしても。

「澪ちゃんって、彼氏の携帯見る人？」
「・・・何のために？」
「ん～なんのためだろ？」

はあん。女か。

濱本は結構もてる。１８５センチだという身長と、見ようによっては知性的に見えるルックスとで目立つのもある。
実際１８５センチって街中で結構目立つよね。待ち合わせするのも見つけやすくていい。

なんか話がずれたが。

それに営業マンだから人当たりもいい。何よりマメだ。

そんな上辺の優しさを（あえて上辺って言っちゃうけど）自分だけのものだって思って近づいてくる女の子がいるんだよな。

んで、断らないんだ。こいつ。

「彼女に見られたの？見られてヤバイ事でもあったんだ？」
「やばいことなんか無いし。もう彼女じゃねぇよ。」

ふてくされたような顔をして濱本は初めて煙草を取り出した。

マルボロを咥えると、いつも持ってるシルバーの細身のジッポで火をつける。

そして一息吐き出すと。

「俺を信じられないなら、俺も信用できない。」

こいつって結構こういうとこ頑固なんだよな。

一見ソフトで優しげに見えるのに、小林さんの件でもわかるように、濱本は結構熱いし頑固だ。

「昨日、俺んちにあいつが来てたんだよ。そこに小林さんから電話あって３０分ぐらい話してたんだ。むかついたから川原に電話かけたけどでねぇしさ。」

・・・ある意味出なくて良かったかも。出てたらその場で言いたい放題言ってただろうし。

「んで、そのあと風呂はいって出て来たら慌てて俺の携帯戻しやがんの。」

はぁ。こっそり見たか、見ようとしてたか、か。もう少し上手く見ようよ。

「前々からあいつ、こっそり俺の携帯見てたんだよね。俺も気付いてたんだけど昨日はその場見ちゃったからさ。『そんなに見たけりゃ見れば良いだろっ！』って投げたら、壁にぶつかって、ぐしゃ。」

ちーん。ご愁傷様。

「あいつは何か、自分が一緒にいるのに長電話してるし疑っても仕方ないでしょうみたいなこと言ってたけど。何かもう面倒くさくなって。俺ちゃんと会社の人でって話したしさ。」

「面倒くさいって。濱本もてるからな。彼女心配で堪らなかったんでしょ」
「もてません。・・・もういいんだ。俺疲れた。」
ぐしゃ。煙草を灰皿に押しつぶしながら濱本はそう言った。
そして頬杖付いたまま、外に目を移した。
もう良いなんて言いながら、実はへこんでんじゃん。
あたしはそう思ったけど、口にせずに同じように頬杖付いて濱本を見ていた。
誰だって疑われたらへこむよな。でも、それを言ったらもっと威勢張るだろうし。
・・・男って大変だね。
「携帯ってもう完全にだめなの？」
「液晶がいっちゃったからメールも何も見れない。どこか電話しようにも番号が出せない。だから今日会社にも電話しなかったっていうのもある。」
「あらら。・・・ん？じゃあさっきどうやってあたしの携帯に電話してきたの？」
「だから昨日そのまま、あいつほっといて連れんち行ったから、そこからかけた。」
「いや、そうじゃなくて。番号見れないのに良くあたしの携帯にかけてこれたな・・・と。」
「それは・・・」
濱本はあたしを見て言った。

「愛の力じゃん？」

・・・そりゃ彼女も心配するわ。

「・・・馬鹿？」

「馬鹿馬鹿って何回言うんだよ。失礼だな。本当は澪ちゃんの名刺が財布に入ってたの。前になんかメモしてくれたじゃん。あれ。」

そんなこともあったっけ。

確かに名刺にはあたしの携帯も書いてあるわな。

ん？だったら・・・

「あたしの名刺持ってるなら会社の番号そこに書いてあったでしょ？」

「あ・・・そか」

あたしは本日何十回目かのため息をついた。

「・・・ほんとに・・・馬鹿？」

濱本は真っ赤になるとまた煙草を咥えた。

「馬鹿馬鹿いうなっ！」

関与

「う。失敗した。」

翌日は穏やかな朝だった。１２月にしては温かい朝。
薄手とはいえトレンチコートを着て来てしまったあたしは、出勤の地下鉄の中で早速後悔した。

何で電車の中ってこんなに暑いんだろう。混んでるから仕方無いのかもしれないけど。

それに、隣のおじさんがやたらと咳き込むのも嫌だ。
お願いだからマスクして。後、鼻をすするのも止めて。
ゲホゲホするならせめて手を当ててくれー。
あ。でもその手で手すり掴まれるのも嫌だな。
う～右半身が何かの菌に冒されそうだ・・・。

事務所のある駅の二つ前の駅でやっと人が三分の一ほど降りた。
あたしはそそくさとゲホゲホおじさんの隣を離れ、扉脇まで逃げ込んだ。
と。頭上から。

「おはよ。」

見上げると濱本がシルバーフレームの眼鏡で笑いかけた。
お。ビジネス仕様だな。

「朝からご愁傷様。お風邪など召されませんように。」

「・・・見てたの？」
「見てたよ。澪ちゃ・・・澤木さんがすっげー嫌そうに逃げ出してきたのも全部。」
すっげー嫌そうにって・・・。
そんなにあたし顔に出てたのかしら。
「そっちは空気が良さそうでいいね。」
周りの人から頭一個分飛び出した濱本の周りには菌は飛んでこなさそうで羨ましい。
「そっちって・・・。」
濱本はさらにおかしそうにクックッと笑った。
あたしたちは扉に向かって並んでいた。もうすぐ降りる駅だ。
「今日はいい天気だなぁ。こんな天気の日に仕事するなんてやだなぁ。」
のんびりと濱本が言った。
「何言ってんの。昨日も仕事して無いくせに。あのあと兼田部長に連絡したの？」
「したよ。電話じゃ何だから今日事務所で話そうってさ。ちゃんと携帯も機種変してきたしね。」
「そか。今日はお説教食らうってわけね？」
「お説教って言うなよ・・・。余計に行きたくなくなる。」
地下鉄がだんだんと速度を落とす。駅が近づいてきた。

行きたくなくても地下鉄は運んできちゃうよね。

「このまま遊びに行っちゃおうか？」

悪戯っぽい目をして濱本が言った。

それは大変魅力的なお誘いなんですけどね。

「何して遊ぶ？」

あたしは濱本を見上げてにっこりと笑った。

「遊園地なんかどう？」

「いいねぇ。スーツ姿の大人が二人平日に遊園地。素敵なシュチュエーションね？」

「でしょ？」

扉が開いた。あたしはさっさと降りながら。

「馬鹿いってないで事務所いくわよ。」

大人にはしがらみって物があるのだ。

「澪ちゃ・・・澤木さぁん。」

「おはよーございまーす。」

「おはよう。」

連れ立って事務所に入ったあたしと濱本を見て、兼田部長が「お？」

という感じで眉を上げたような気がするけど。
見ない振り見ない振り。
別に一緒に出社したわけじゃないもんねー。
「濱本君朝礼の後時間空けてくれ。」
「わかりました。」
・・・お説教タイムだね。頑張れ濱本。

ランチタイム後。
お客様の所へ向かっていたあたしの携帯が短く震えた。
『部長のお話終了。状況は最悪。』
濱本からのメールだった。
『お疲れ様です。最悪って何?』
歩きながらあたしは短く返す。
するとすぐに返ってくるメール。返信じゃなくて濱本が続けて送ってきたらしい。
『澪ちゃん今日の夜空いてる?』
彼氏とデートだから無理、なんていってみたいとこだけど。

また、「聞いてくれよ～」かな。聞いて気が晴れるならいいかな。

『いいよ。デフェール？』

『7時にデフェールで待ってる』

『了解』

最悪な状況に興味があったのが半分。心配だったのが半分。

まさかその「最悪な状況」とやらにあたしも関わってしまうなんて
このときは思いもしなかった。

謝罪

「ごめん。お待たせ。」

7時半。

あたしはデフェールに入ると、喫煙席の一番奥で携帯を見ていた濱本に声をかけた。

「遅いから今メールしようと・・・って、何かあったのか？」

濱本はあたしと目が合うと少し眉をひそめた。

あたしはそれには答えずコートを脱ぐと、いつものようにカフェオレを注文し煙草に火をつけた。

そして一息吐き出してから。

「・・・なんで？」

「澪ちゃんがメールもせずに遅れるなんて珍しいし、何か・・・怒ってる気がする。」

「別に怒ってない。」

そう。怒っても仕方ない・・・こいつに。

自分に言い聞かせて、もう一度煙を吐いた。ため息と一緒に。

「そう？」

「ん。」

「ならいいけどさ。」

ビジネス使用の濱本が、じっとあたしの顔を見つめるから。

わざと視線をはずして、鏡みたいになった窓ガラスを見ていた。今度は濱本がガラスに写ってるあたしの顔を見つめる。

・・・今はあたしの目を見ないで。

やっぱり視線は合わせられなくて、運ばれてきたカップに視線を移してカップを口元へ運んだ。

「・・・あち。」

「急いで飲むからだよ。猫舌のくせに。」

濱本が笑った。

「・・・くせにって言うな。・・・にが。」

「澪ちゃん、砂糖入れ忘れてるからな。」

・・・あ。そっか。

あたし・・・なんか変だな。

あんなことでダメージ食らうはず無いのに。

あんな奴にダメージ食らわされたくないのに。

ぼんやりと考えながらまた窓ガラスに顔を向けたあたしに濱本が言った。

「よし。」

・・・ん?

「飲みにいくぞ。」

・・・へ？
やっと正面を見たあたしに、立ち上がりながらもう一回言った。
「飲みにいくぞ。」
・・・普通「飲みにいくぞ」って言ってカラオケボックスに来るものなの？
一口しか飲んでない砂糖なしカフェオレをそのままに、煙草を慌てて灰皿に消して、さっさと行ってしまう濱本を追いかけてきたら・・・。
そこはカラオケボックスでした。
「とりあえず3時間で。」なんて勝手に決めてるし。
「・・・なんでカラオケボックスなのよ？」
「大声出せばすっきりするかなーと思って。ここなら大声出し放題じゃん？」
あたしの前にはジンライム、濱本の前にはウーロン茶。
・・・こいつ全く飲めないんだよな。
「飲めないのに飲みに行くぞなんて言う？」
「いいの。いいの。気分の問題だから。」

まあ、ウーロン茶でも飲むには変わりないよな。
とりあえず、ジンライムを飲みながらあたしはぼんやりと考えた。

「で。何に怒ってるの？」

コの字型のソファに向かい合うように座った濱本が言った。

「別に怒ってないって。」
「怒ってるよ。俺に？それとも他に何かあった？」
「濱本に怒ってるわけじゃない。」
「じゃあ何に怒ってるの？」

わからない。
だから答えられない。

そしてジンライムを飲み続ける。
一杯飲みきったところで、やっと口を開いた。

「兼田部長に聞かれたの。」
「なんて？」
「君と・・・どんな付き合いなんだ？って。」

「濱本とどんな付き合いをしているんだ？」

夕方オフィスに帰ったあたしを会議室へ連れ出すと、兼田部長はいきなりそう言った。
どんな付き合いって・・・

「・・・同僚ですが？」

「そんなことは解ってる。プライベートで会うこともあるのか？」
「何処からがプライベートなのか解りませんが。」
だからそれが何？
「二人で会うことはあるのか？」
何が聞きたいんだろう。
「終業後に喫茶店で話したりすることはあります。」
「そうか。それだけか？」
それだけって・・・なんだ？
「何をお聞きになりたいのかがわかりません。濱本さんは同僚ですし話すことも多いです。」
何か・・・だんだんむかむかして来たんだけど。
言いたい事があるならはっきり言おうよ。
あたしが濱本とどんな付き合いかなんて、兼田部長に会社で聞かれるような事なの？
あたしの覇気に押されたのか兼田部長は少し視線をそらしながら言った。
「澤木・・・。付き合う人間は選べ。」
え？

「付き合うならもっと高め合える仲間を選べ。」
「・・・どういう意味ですか？」
「そのままの意味だ。会社は仲良しごっこをする所じゃない。」
「仲良しごっこをしに来てるつもりはありません。」
濱本とあたしじゃ高めあえないって言いたいの？
仲良しごっこって何？
「誤解を生むようなことはするな。そんな暇があったらもっと出来る仕事があるだろう。」
あたしは兼田部長からじっと眼を放さず、両手を握り締めた。
「濱本に関わってるとろくなことが無いぞ。」
何をもってそんなことを言うの？
「澤木もっと人を見る目を養え。」
言いたいだけ言うと兼田部長は、あたしに目も合わさず会議室を出て行った・・・。
2杯目のジンライムを飲みながらあたしは兼田部長に言われたことを濱本にぽつぽつ話した。
「濱本に関わるとろくなことがない」っていうのは言わなかったけど。
話しているうちにあのときの腹立ちが甦ってきて2杯目はあっとい

う間に無くなった。
今になっても何に腹が立ったのか解らないでいたけど。

「そか・・・。おかわり同じのでいい？」
「うん。」

3杯目のジンライムと2杯目のウーロン茶を注文すると、濱本は組んでいた足を戻し姿勢を正した。

「ごめん。」
「どうして濱本が謝るの？あたし別に濱本に怒ってる訳じゃないよ？」

なのに濱本はもう一度頭を下げた。

「でも、俺が澪ちゃんを巻き込んだ。ごめんな。」

誤解

「・・・巻き込むって・・・。」

あたしがそう呟くと同時に、ゆっくりとノックの音がして3杯目のジンライムが届いた。

ちょっとヤバイな。すきっ腹に3杯目。
でも他にすることも無くて、またちびちびと口をつける。

と。テーブルを挟んで向かい合って座っていた濱本が、あたしの隣に来たかと思うとグラスを取り上げた。

「ピッチ早すぎ。」
「大丈夫だよ。・・・多分。」
「多分って何だよ。」

濱本は少し笑ってグラスをテーブルに置いた。

「部長に呼ばれたのはいつ?」
「事務所に戻ったときだから・・・5時前かな。」

あたしが戻ったときは濱本はいなくて。
ホワイトボードには得意先の名前と「直帰」の文字があった。

「何ですぐに言わなかったの?メールでも電話でも出来たじゃん。」
「濱本怒ると思ったから。」

・・・違う。

濱本が傷付くと思ったんだ。
傷つく・・・悲しむ。

「嫌な思いさせてごめんな。」
「嫌な思いっていうか・・・なんで兼田部長にそんなことを聞かれたのか、付き合う人間は選べなんて言われるのかがわからない。あれがどういう意味だったのかわかんないよ。」

あたしはそう言うと、濱本が置いてくれたグラスをまた手にして一口飲んだ。
ぐらりと酔いが回ってきたのを感じたような気がした。

「俺ね・・・ＫＡＲＩＹＡの担当はずされたんだ。」
「え？」

ＫＡＲＩＹＡは濱本が開拓してきた新規の顧客でエステティックの会社だ。
うちの会社は広告代理店でＣＭや雑誌への広告や、イベント企画などを担当している。

「昨日無断欠勤したからって担当はずされちゃったの？」
「そうじゃないよ。」
「じゃあなんで？」
「昨日ね、川原にＫＡＲＩＹＡの広報から連絡があったんだ。担当替えてくれって。そうじゃなかったら契約打ち切りにするって。」
「・・・なにやらかしたの？」

あたしはグラスを置くと隣の濱本に体を向けた。

「やらかしたって失礼だな。」

「何も無くていきなり担当替えなんてありえないでしょ。」
「あのね・・・。ＫＡＲＩＹＡの広報部長がね。」
とても言いにくそうに濱本は続けた。
「広報部長が・・・彼女だったの。」
ええ～～～～！！
そ、そうだったの??
「知らなかった。」
人の彼女なんて興味ないし。
年上だとは聞いてたけど・・・ＫＡＲＩＹＡの広報なんて知らなかった。
「だからＫＡＲＩＹＡの契約貰ったって事?」
「違うよ!付き合いだしたのは契約貰った後だ。この2ヶ月ぐらい。」
あ。失礼なこと言っちゃった。
まるで恋愛商法やってるみたいな言い方しちゃったな。
「・・・ごめん」
「別に澪ちゃんが誤ることじゃないよ。川原にも『女たらしこんで契約貰うからだ』って言われたしね。」
・・・すげー言い方だな。
「ＫＡＲＩＹＡの担当はどうなるの?」

「川原が担当するんだって。今日午前中兼田部長にそう言われた。彼女から川原に来た連絡の内容は、そのあと川原から聞いた。」

なるほど。それで『状況は最悪』ってメールになるんだ。

「ほんとに最悪だね。」

あたしは煙草を取り出すと火をつけながら言った。

・・・ん?ちょっと待って。

それでどうしてあたしは兼田部長にあんなことを聞かれたんだろう?

「で。ここから澪ちゃんに謝らなきゃいけないことなんだけど。」

う。嫌な予感がするぞ。

そこにあたしは関わってるのか。

「彼女が川原に言ったんだよね。『人の物に手を出すような社員がいる会社は信用できない』って。」

「人の物?手を出す?」

意味がわからないんですけど?

濱本は頭をガシガシ掻きながら言った。

「彼女・・・俺と澪ちゃんの事疑ってたらしいんだよ。」

ええ~~~~~~っ!!!

「何でそういう事になるわけっ?」

「彼女が携帯見てたって言ったじゃん?着信とかメールとか見てたらしくって。」

「メールって疑うようなメールして無いじゃん。『契約がんばれー』とかそんなんじゃん。」
「そうだよ。でも着信とか発信も多くて疑ってみたい。」
いやいやいやいや。
「それは濱本がなんだかんだわからなかったら電話してくるからじゃん！」
後、聞いてくれよーって愚痴もあるしな。
「そのとおりです。申し訳ない。」
「え～。何その誤解。思いっきり濡れ衣じゃない。」
手を出すとかっ。あたし手を出した覚えないしっ。
「う～。ごめん。それでね・・・」
ああ。もうこれ以上聞くの怖いんですけど。
「彼女澪ちゃんの名前も出したらしいんだよね。」
うわ～～。
川原課長がそれ聞いて兼田部長に言わないわけないんもんな～。
やっとわかった。今日の兼田部長の話の意味が。
あたしと濱本が出来てるって思ってたわけだ。
さらに朝の視線の意味もわかった。

うわうわうわうわ。

今日一日そういう目であたし見られてたんだ。

言い方悪いけど「濱本のお手つき♪」みたいな。

うわうわうわうわ～～～。

「何なのよそれっ！！！」

すっげー腹立ってきたっ。

「人の物ってなによっ。大体濱本は物じゃないしっ。」

むかむかむかむか。

何もかもに腹が立った。

喧嘩したか何か知らないけど、その事と仕事を混同する濱本の彼女に。

だから女はって言われちゃうんじゃん。恋愛とビジネスは関係ない。

そんな人と濱本を取り合ってるように思われている状況にも腹が立った。

ＫＡＲＩＹＡの広報部長から抗議を受けて、きっと嬉しそうに兼田部長に報告したであろう川原課長に。

ああ。尻尾振りながら報告したんだろうな。

「このクレームは俺のせいじゃないですよ～。」って。

そしてそれを、わけのわからない質問で確かめようとした兼田部長に。

もう何もかも腹立たしかった。・・・悔しかった。

「怒る所そこ？」

濱本がいつものように穏やかに笑った。

「だって。だって。濱本は腹立たないの？！川原課長にそんなこと

言われて。悔しく無いのっ？」
「悔しいよ。」
「だったらなんでそんな平気そうに笑うのっ。」

・・・ぽろ。
あたしの目から涙がこぼれた。一回こぼれてしまった涙はぽろぽろと止める事が出来なくなった。

いつもそうだ。感情が高まってしまうと涙が止められなくなってしまう。

・・・何で涙が出るのかわからない。

「平気じゃないよ。」

そう言うと濱本があたしの右手を取った。冷たい手だな、と思う。

「澪ちゃんに迷惑かけて平気なはず無いよ。ごめんな。」

そうじゃなくて。あたしのことじゃなくて。
自分の為に怒りなよ。

「・・・泣かないでよ。本当にごめん。」

そういわれて、あたしの涙腺は何かが決壊したようで。

「・・・もう。やだ・・・。」
「澪ちゃん・・・」

謝ってほしいんじゃないの。

余計何だか悲しくなるの。

「何で謝るの？濱本が悪いんじゃないじゃん。」

「いや。それは。」

「大体何でそんな事言われて、おとなしく言うことききいてんのよっ。」

「おとなしくって・・・。」

「男として仕事馬鹿にされて悔しくないのっ？！」

「ちっちょっと。」

「何で仕事に恋愛沙汰持ち込むのよっ」

「・・・。」

ぼろぼろ泣きながら濱本に思いつくこと片っ端って感じで。

壊れてる、あたし。でも止められない。

「なんでっ。何であたしがっ・・・。あたしが怒ってるのに濱本は怒らないのよっ。」

その瞬間ぐいっと引っ張られた。

ええっ？

次の瞬間には、あたしの視界いっぱいにネクタイとカッターシャツ。

ほええ？

「俺の代わりに怒らなくていいから。」

聞こえる濱本の声は頭の上からで・・・。

あたしをあやす様に背中をたたく手があって・・・。

これって・・・これって。

「ちょ、ちょっと濱本。」

「ありがとな。」

声がさっきより近いしっ。この声って耳元だよね？

ってか、あたし濱本の腕の中・・・？

「澪ちゃんに迷惑かけたのに、何で俺のために怒ってんの？」

「・・・だって濱本が怒らないから・・・。」

「ありがと。もう泣かなくていいから。」

とんとん。

ゆっくり背中をたたく手が心地よくて。

感情が爆発した反動で一気に気持ちが緩む。

「・・・止め方がわかんない・・・。」

くくっ。濱本の喉が少し笑い声を立てる。

「よしよし。じゃあ泣き止むまでこうしてる。」

背中に回っていた右手があたしの髪をなでた。

よしよしって・・・あたしいくつよ？

「・・・澪ちゃんが泣くの見るの何回目かなぁ。」

え?!
思わず顔を上げたら。
あまりにも至近距離な濱本の顔があって。
いつものように少し笑っていて。
「何回目って?」
こいつの前で泣いたことなんてないはず。
絶対にないはず。
そんな恥ずかしいこと（今はしてるけど）ないはずだ。
「泣いてるでしょ。トイレとか、皆帰った後の喫煙ルームとか。」
「見てたの?」
「何回か見かけたよ。見られたくないみたいだったから声かけなかったけど。」
ああ。あたし格好悪い・・・。
悔しくて泣いたあの時とか、あの時とか、あの時とか・・・。
何回か思い当たるだけにすっげー恥ずかしい。
「さすがにトイレで泣いてたのは見たわけじゃないけどね。それ見てたら俺やばいし。」
そりゃあ、そうでしょう。
そうか・・・見られてたんだ。こいつに。
って!!!何この状況!!
濱本の腕の中でこの至近距離での見つめ合いは何?!

「涙止まった？」

はい。

今更ながら状況を把握したら、涙がぶっ飛びました。

ひえ～～なんかすっげ～恥ずかしいんですけど。

思わずまた下を向いてしまい、目の前はネクタイとカッターシャツ。

「う、うん。止まった。だからありがと。」

濱本の肩を両手で押し戻す。なのに。

・・・こいつなんでさらに腕に力入れてんの？

「もう大丈夫。だから。」

「ん？だから何？」

「だから離して？」

「無理。」

「なっ！なにいってん・・・」

ふざけてるの？って言おうとして濱本を見ると。

もう笑ってなくて。

なんだか怖いくらい真剣な目をしていて。

「んっ。」

・・・え？

柔らかいものがあたしの声を塞いだ。

・・・唇？
なに？なに？なんで？

それと同時に背中と首筋に回された腕はさらに力強くなって。
胸が苦しくなって目を閉じてしまう。

「・・・んんっ・・・。」

これは・・・あたしの・・・声？
息が・・・苦しい・・・。

やっと濱本が唇を少し離した。

「・・・はまも・・・と」
「・・・そんな・・・顔をするからだ・・・」
「んんっ」

再び温かい唇があたしを塞ぐ。冷たい手があたしの髪をなでる。
そして。

「ん・・・んんっ・・・。」

あたしの中にさらに熱いやわらかいものが入ってきて。
あたしの中にもある熱い舌を絡めとる。

「ん・・・やっ・・・。」

・・・こいつ・・・うまい・・・。
なんて思ってる自分に余計にわけが分からなくなって。

ただそれを受け止めていた・・・・。

錯乱

「・・・あう。行きたくない・・・。」

朝6時。
結局殆ど眠れなかった。
何とかベッドから這い出してきたものの。
着替える気にもなれずに煙草を咥えて、ゆらゆら昇る煙を見つめる。

今日はどうしてまだ金曜日なんだろう。
昨日が木曜日だから仕方ない事とはいえ。

何でまだ金曜日なんだよ～。土曜日じゃないんだよ～。

ああ。会社に行きたくない・・・。
大体どんな顔して行ったら良いのかわからない。
どんな顔して・・・あいつに会えば良いのか。

「いい大人がキスぐらいで欠勤なんかしたら馬鹿だよな・・・。」

うわ。
自分で言葉にしたら思い出しちゃった。

あれ・・・ほんとにあった事なんだよね？
自分でも現実逃避入ってると思うんだけど。あまりにもリアリティがなくて。

でも。あいつの腕とか、髪を撫でる手とか。
いろんな感触をあたしの背中が、髪が、そして唇が覚えていて。

あれが本当だったと告げている。
ただ呆然と濱本のキスを受け止めて。
どれくらい経ってたんだろう。

「ｐｉｐｉｐｉ・・・」
部屋のインターフォンが鳴った。
その音に濱本の唇がそっと離れた。
「・・・なんで？・・・」
あたしの呟きに濱本が微笑んだ。
「したくなっちゃったから。」
し、したくなったって。したくなったってっ！
「ちょっと待って。」
濱本はあたしから離れるとインターフォンを取った。
「・・・あ。はい。解りました。・・・１０分前だって。延長する？」
あたしはぶんぶんと首を横に振った。
だってこれ以上ここにいてどうして良いかわからない。
「・・・あのさ。」

インターフォンを切った濱本が、そのまま向かい側に座って煙草に火をつけて、何か言おうとした。

「・・・帰る。」

これ以上何か言われても、あたしの脳はそれを理解する域を超えてしまってる。
何せすきっ腹にジンライム3杯。さらにとんでもない誤解。
人前で子供みたいに泣いて。
その上「したかったからしちゃった」って奴とキスまでしちゃって。
もうお腹いっぱいです。処理能力オーバー。

「え?」
「あたし帰るね。」
「ちょっと待ってよ。」

コートと鞄を持って濱本の隣のドアへ向かったあたしの腕を、濱本は掴んだ。
・・・そして。

「・・・ごめん。」

その言葉に胸がうずいた。謝れば済む様な簡単な勢いだったの?

「謝る様な事あたしはされたの?」
「いや、そうじゃなくて。」

ばしっ。手を振りほどくと答えは聞かずに部屋を出た。

「・・・あ。カラオケ代払ってないや。」
問題は確実にそっちじゃないのに、あえて自分の意識をそっちへ持っていこうとしてる、あたし。

7時半。
もう準備をしないと始業時間に間に合わない。

例えば今日あたしが休むとするでしょ？
とりあえず「休みますバージョン」のシュミレーションを始めてみる。

休みますと電話をする・・・誰に？
会社の決まりでは「直属上司に始業前に電話にて連絡」って事は川原課長か兼田部長。
昨日の今日で休むあたし。

嫌だ。今日一日どんな憶測が流れるかわかったもんじゃない。
嫌だ。それだけは嫌だ。

よし。行こう。
何もあたしは聞かなかったし、何もなかったんだ。
こういう時営業職で良かったって思うわ。とっとと外回りに行っちゃえばいい。
何も考えずに。誰の顔も見ずに。
ごめんで済むような事にあたしがうだうだ悩む必要はないのだ。

やっと重い腰を上げて、顔を洗い歯を磨いて。
戻るついでに、昨日玄関に放置したコートと鞄を部屋へ持ってきた。

と。コートのポケットに入れっぱなしにしていた携帯の存在を思い出す。

・・・充電しとかなきゃ多分今日充電持たないな。
営業職には携帯は命ですから。とりあえず充電充電。

「うわ。なんだこれ。」

思わず独り言言っちゃった。

サブディスプレイには「新規着信あり　伝言メモあり　新規受信メールあり」の文字。
・・・まあフルラインナップね。
あけてみるとメインディスプレイにたくさんのアイコン。
着信４件・伝言メモ３件・メール４件。

・・・濱本だ。

着信履歴には、上から４つ「濱本史人」と並んでいた。
きっと伝言メモも、メールも濱本だろうなって思う。

でも今見てる暇はない。時間がヤバイし・・・・。

きっとメッセージ聞いたり、メール見たら。
それにもっと掻き回されてしまったら。

きっとあたしは今日会社に行けなくなるから。

きっともっと心は掻き回されてしまうから。

だから。

今手の中で震えている青いランプも見なかったことにした・・・・。

通話

『電話に出てください。』

一つ目のメールはこれだけ。

家を出で地下鉄で向かう途中。やっとメールを見る気になって一つ目をあける。

案の定メールも伝言メッセージも全部「濱本史人」の名前だった。

まだ伝言メッセージの声を聞く勇気はなかった。

それでも。

さすがに家を出てしまえば、体が覚えているというのか。自然と会社へ向かうわけで。

習性って怖いよな、なんて思う。

今日は黒のパンツスーツにした。髪もシュシュでまとめて。

本当に今日は目立ちたくない。そして朝礼が終わったら声がかからないうちに逃げ出してやるんだ。

河原課長も濱本も来る喫煙ルームはしばらく立ち入らないでいよう。

・・・ちょっと辛いけど。

わざと少し早足で勢いをつけながら、二つ目のメールを開ける。

『頼むから電話に出て。』

と、いうことは電話してはメールしてって繰り返してたんだな。

申し訳ないけどそのときにはもう、携帯放置してたんだよね。

そして３つ目

『ちゃんと家に帰れてるの？』

４つ目は明け方４時過ぎに来ていた。開けて、びっくりした。さっと見ただけで分かる長文。

・・・携帯メール好きじゃないくせに。

読むのが怖いような気がして、また閉じた。

地下鉄の駅が近づいてきた。

地下鉄に乗る前にはメッセージを空にしておかなきゃ。

あたしの携帯にはメッセージが３つしか残せない。

電波が届きにくい所でお客様から電話が入ったらメッセージ入れてもらう事ができない。

ということは。

聞かないで全部消しちゃうか、聞いてから消しちゃうか。

・・・聞かないで消すことは、出来なかった。

『どこにいる？電話出てください。』

一つ目のメッセージはそれだけ。あたしが店を出てすぐ。

あたしが店の前から直ぐにタクシーを捕まえたその頃。

・・・声を聞くとなんだか胸がずきっとしたような気がした。

『大丈夫？家に帰ったらメールでも良いのでください。』

二つ目のメッセージは、あたしが家について玄関に荷物を放置した頃。

地下鉄だったら家の最寄り駅に着く頃。その頃を見計らってかけてきたんだな。

『・・・ちゃんと家に着いた？これ以上は遅くなるので・・・またメールします。おやすみなさい』

おやすみなさいって・・・平和なこといってるなぁ。

とりあえず聞いた。うん。だから消す。

そして全件削除を押してはいを押したその瞬間。

「着信濱本史人」の文字がディスプレイに表示された。

本日一番話したくない相手だってば。

うわ。どうしよう。キー押しちゃったから・・・出ちゃったよ。

うわうわうわ。どうしよう。

「・・・もしもし？」

スピーカーから濱本の声がする。どうしよう・・・どうしたらいいの？

「もしもし？」

ああ。もう仕方ない。

「・・・はい。」

すっげー嫌々そうな声出しちゃった。

「おはよう。」

「うん。おはよう。」

「昨日はちゃんと帰れた？」

「うん」

「そうか、良かった。」

「うん。じゃあもう地下鉄はいるから。」

それだけ言うと、あたしは地下鉄への階段を下りた。

ここも電波悪いからそれで切れたということにしてしまおう。

そう思いながらボタンを押した。

いつもより一本早い地下鉄に乗ってしまおう。

あいつに・・・出会いたくないから。

昨日の今日で一緒に出勤なんてとんでもないっ。

そう思って急いで改札を抜けたら・・・そこに。

本日一番出会いたくない相手があたしを見つめて立っていた。

「おはよ。」

周りよりも頭一つ高いそいつは、スーツ姿の人々の中でダウンジャケットにジーンズ姿でさらに目立っていた。黒いセルフレームの中の眼は今日は笑っていなかった。

「・・・どうして？」

それに続く言葉はなんだったのだろう？
どうしてそんな格好してるの？
どうしてプライベート仕様なの？
どうして・・・ここにいるの？

「澪ちゃんを拉致りにきた。」
「え？」
「とりあえず流れとめちゃ悪いし・・・行こう。」

そう言われて。
立ち止まってしまったあたしをいぶかしげに眺めながら、よけていく人々にやっと気づいた。

こんな格好でこの時間にここにいるって事は。
こいつは今日は出社しない気なんだな。
だったら、それはそれで気が楽だし。

あたしは濱本の横をすり抜けると、さらに階段を下りた。
あたしは会社に行くんだから。

そんなに急がなくても大丈夫。
今右のホームに入ってきているのは反対方向の地下鉄で。
あたしが乗るのはその2分後に左のホームに来る。

と。その時。
あたしの右腕を掴んだ奴がいた。

「これ乗るぞ」
「なに言ってんの？」

あたしに有無を言わさず、濱本は腕を掴んだまま階段を走り降りると郊外へ向かう地下鉄に飛び込んだ。
それを待っていたかのようにベルは鳴り、扉が閉じた。

「ちょっちょっと。何するのよ。反対乗ってどうするの?」
「だから、拉致りに来たって言ったでしょ。」

なっ。何言ってるんだこいつは。

「あたし次で降りるからね。もう。時間がやばい。」

郊外へ向かうほうの地下鉄とはいえ誰もいないわけじゃない。
あたしは声を抑えながら濱本をにらみつけた。

・・・とりあえず、あたしの右腕を放してよ。

「・・・降ろさない。」
「あたしは会社に行くんです。」
「行かせない。」

ほんとにどうしちゃったのこいつ?

「最後まで話しを聞いてくれるまで、放さない。」

・・・あたしの社会的立場はどうなっちゃうの???

覚悟

「・・・何処へ連れて行こうって言うの？」

地下鉄の中、扉の前に立ったまま、あたしは尋ねた。

「話のできるところ、かな。」

「あたしは会社に行かなきゃ。無断欠勤はごめんだわ。」

・・・君じゃあるまいし。そんな意味をこめて濱本を見上げる。

「それは大丈夫。澪ちゃん今日有給になってるから。」

・・・へ？

有給申請なんて出してないし。

「昨日最後まで話聞かなかったでしょ？」

「・・・聞かなかったんじゃない。聞けなかったの。」

「まあね。」

濱本が少し上に視線をそらしながら言った。

何でこいつが赤くなるのっ。ついつられてあたしも耳が熱くなって来ちゃうでしょ。

「な、何で有給なのよ？」

「それも後で一緒に話すから。」

訳が解らない。

でも。
こいつはそういう行き当たりばったりな嘘をつく奴ではないと思う。
だから、何故か解らないけどあたしは今日有給になっているのだろう。

「とりあえず、腕を放してくれないかな?目立って仕方ないよ。」

朝の地下鉄の中に腕を取って連れ込まれる人なんて、そうそういるもんじゃないだろう。
これ以上あたしは目立ちたくはないのだ。

「逃げない?」
「・・・逃げない。」
「わかった」

やっと濱本の手から開放されて、あたしはとりあえず空いていた座席に座った。
隣は空いていたけれど、濱本は何故かあたしの前に立った。
只でさえ背が高いのに、見上げるだけで首が痛くなりそう。

「・・・終点まで行こう。」

濱本が壁の路線図を見ながら言った。

「緑地公園?何しに?」
「何しにって訳じゃないけど・・・。なんとなく行ってみたくなった。」

もう。こうなれば半分どうとなれって気分。

「・・・澪ちゃん、降りるよ?」
３０分ほどしただろうか。濱本の声であたしは目を覚ました。
・・・覚ました?やば。あたし寝ちゃったのか。
座って下を見ていたら・・・ついうとうとしてしまってたんだ。
寝てないもんな。

状況がいまいち飲み込めなくてボーっとしているあたしを濱本が覗き込んでいた。

「終点着いたよ。降りよう。」
「ん。」

緑地公園駅。来るのは初めてだな。
清算をして改札を出て地上へ上がると・・・そこはもう公園の入り口だった。

平日の朝なので、人は少ないけれど。

中途半端に寝てしまったからか、あたしはまだ頭がぼんやりしているようだ。

「ちょっと歩くか。」

そういうと濱本は歩き出した。ゆっくりと。本当にお散歩に来ましたって感じで。

あたしも釣られて歩き出した・・・けど、
平日の朝の緑地公園に、パンツスーツにビジネスバックの女。

似合わない事この上ないよな。

あたしが逆の立場だったら、この人ここで何してるんだろうって思うわよ。

自覚してるんだからあんまり見ないでほしいなぁ、ベビーカー押したママさん。

と、濱本が振り返った、

「これ、着ときな。」

と同時に渡されるダウンジャケット。

「え？いいよ」

「そのままでいるより目立たないから。それに寒いだろ。」

確かに１２月の風は少し寒くて。

あたしはコートを着てくるのを忘れるくらい動転してたんだな、と思う。

「濱本は寒くないの？」

ダウンの下はパーカーとジーンズ姿。

「大丈夫。」

「・・・ありがと。」

さすがにメンズのＬのダウンは大きすぎたけど、スーツのジャケットが隠れたのでありがたく借りることにする。

かすかに男の人のにおいがして、なんだかどきどきするけど。

緑地公園はかなり広かった。

野球用のグラウンドがあったり、芝生があったり。その向こうには池まであった。

休みにお弁当持って遊びに来たら楽しいだろうな。バーベキューとかも良いだろうな。
あーあ。こんなシチュエーションなのに、あたしってお気楽だなぁ。
そう思ったら、何か笑えて来ちゃって、あたしは立ち止まってうーんと伸びをした。

「・・・どうしたの？」
前を歩いていた濱本が振り返った。
「いや。お弁当持って遊びに来たら楽しいだろうなって思って。」
濱本が少しびっくりしたような顔をして、そして微笑った。
「うん。楽しいだろうな。俺も今そう思いながら歩いてた。」

「だよね。もう少し温かくなったらきっと楽しいよね。」
「澪ちゃん、寒い？」
「あたしはこれ貸してもらってるから。濱本のほうが寒いでしょ？」
「俺は平気・・・といいたいとこだけど。寒いな。」

あたしはさらに笑ってしまった。
こういう所素直な奴だなぁ。

「そこへ入るか。」

公園の池の傍に小さなレストランがあった。この時間はモーニングをやっているらしい。
世の中には平日に公園へ散歩に来てモーニングを食べる人なんて言うのもいるのか。
あたしはそう思った。

入ってみると他には老夫婦が一組だけだった。
あたしと濱本は池が見える窓際に座ると、温かい飲み物を注文した。

「煙草吸っていいですか？」
珈琲とレモンティーを持ってきてくれた店員に濱本はポケットの煙草を取り出しながら尋ねる。
「あ。すぐに灰皿お持ちしますね。」
「有難う。お願いします。」

そして。

お互いに一服吐き出したところで、濱本があたしを見て口を開いた。

受信

「・・・昨日寝てないんでしょ？」

右手で頬杖ついて、少し覗き込むように濱本は言った。

眠れなかったなんてなんだか素直に認めたくなかったけど。

・・・地下鉄の中で寝ちゃったもんな。認めざるをえない。

地下鉄ってどうしてあんなに座席の足元があったかいんだろ。

眠りを誘ってるとしか思えないっつーの。

「・・・ん。」

「寝ないとお肌に悪いよ。」

「誰のせいよ。」

「俺のせいです。」

・・・素直でよろしい。ふっと思わずいつものノリになりそうになってしまう。

あたしはそれを押しとどめて、もう一度煙を吐く。

「昨日は、ごめん。」

あたしは左手を思わずぎゅっと握った。

・・・謝って欲しいんじゃない。むしろ謝られたくない。

「あのね。今のごめんは、なんて言ったら良いんだろ、貴女を動揺させてごめんってことで。」

「・・・意味が良くわからない。」

「いや。だから。」

濱本はレモンティーを一口飲むと、ふと思いついたように言った。

「澪ちゃんもしかして俺のメール見てない？」

めーる？

いきなり変わった話に、とっさにそれが携帯メールのことだとはわからなくて、あたしはぽかんと濱本を見た。

「・・・見てないのね。俺の超大作。」

・・・なんだよ超大作って。長いメールは超大作なのか？

「・・・そうか・・・見てないのか。だからああいう反応なんだな。」

濱本はぶつぶつと呟いていたかと思うと、いきなり椅子にかけていたダウンジャケットを持って立ち上がった。

・・・え？ちょ、ちょっと濱本？

「えーと。俺公園の入り口にあったコンビニに煙草買いに行ってきます。」

ほえ？たばこ？

「煙草ないならあたしの吸えば？メンソールだけど。」

何故今いきなり煙草買いに行くことになっちゃうわけ？

「いや。んーと。行ってくる。」
「そうですか。」

あっけにとられて、あたしの返事もなんか間抜けだ。

「でさ。その間に・・・。」

ダウンジャケットを着ながら背中を向けて濱本は言った。

「一番長いメール。読んどいてくれよ。」
「メール？」
「そ。読んどいてね。」
「う・・・うん。」
「んじゃ。いってきます。」
「はぁ。いってらっしゃい。」

そのまま振り向かずに濱本は店を出て行った。
行ってらっしゃいって・・・なんともおかしな会話だ・・・。

残されたあたしはとりあえず珈琲を口元へ運びながら携帯を取り出した。

メールって・・・確かに長くて読んでないけど。
それが何なの？

帰ってきてから見れば良いんじゃないかと思うし・・・。
それに今目の前にいるんだから、伝えたいことが書いてあるなら言えば良いじゃん。

そう思いながらあたしはメールを開いた。

Ｒｅ：（いつも濱本のメールはタイトルがない）

ちゃんと家には着いてる？

澪ちゃんは怒るかもしれないけどやっぱり・・・今日はごめんね。
いろいろ澪ちゃんに迷惑をかけてしまった。
これは謝りたいことだからしつこいかもしれないけど。
本当にごめん。

あと、俺のために怒ってくれて有難う。
喜ぶところじゃないかもしれないけど嬉しかった。
俺のために怒ってくれる人がいるってすっげー嬉しかった。

澪ちゃんって泣いたりするとき人に見せないイメージだったから・・
・。

いつも話聞いてくれて、さくっと俺が気付かないようなこと言ってくれて
なんて言うかな
いつも助けられてる
そう思います。

いつも頼ってばっかでごめん

でもいつも冷静に聞いてくれる澪ちゃんが泣いてるのみたら
泣かせたの俺なんだけど・・・
一人で泣くなよなんて思っちゃってああいうことになったわけで

馬鹿だな俺

うまく言えない

とりあえず泣きたくなったら俺の傍で泣いてほしいとか思う

きっと酔ってるんだな俺

明日また話します

おやすみ

「・・・酒飲めないのに酔ってるわけないじゃん。」

読み終わってあたしの口から出た言葉に思わず自分で笑って。

「何が言いたいのかわかんねーよ。」

もう一度一人で呟いた。

まだ濱本は戻ってこない。

そりゃこんなメール目の前で読まれるのはこっぱずかしい・・・かも。

でも。何かわかんないけど。

あたしは何で笑えてきちゃうんだろう。

このメールが届いてるのが夜中の４時ごろってことまでおかしくて。

夜に書くメールは違う意味で酔っちゃってやばいよね、なんて思って。

またおかしくなった。

ふと窓の外を見ると。
池の向こう側を歩いている濱本が見えた。

・・・コンビニはそっちにはね～よ。
タバコ買ってくるなんてのも、メール読んでる間逃げ出す口実だったわけね。

あたしはくすくす笑いながら、もう一度珈琲カップを両手で持ち上げて流し込んだ。
一人で笑ってる自分に自分で（怪しいよお前）って突っ込みながら。

携帯をもう一度開いて。着信履歴を出して。
一番上にある名前に発信をする。

池の向こう側でポケットから携帯を取り出す濱本が見える。

ツーコール目で昨日耳元で聞こえた声が携帯から聞こえる。
「・・・メール、読んだ？」

あたしは笑いながら答える。
「読んだ。」

そして。
「コンビニは池の向こう側にはないと思うよ」
「・・・あ。」

始動

「・・・おかえり。」

１０分後。
バツの悪そうなむすっとした顔で濱本は戻ってきた。
それもなんだか照れ隠しに見えるから、あたしは微笑む。

「ただいま。」

なんだか楽しい気分になっているのはきっと寝不足のせいで。
ナチュラルハイになっているのは自覚済み。

「・・・何ニヤニヤしてんの。」
「別に。素敵な超大作だったわ。」
「けっ。嫌味に聞こえる。」
「素直な感想よ？」

椅子に座ると濱本はすっかりさめたレモンティを飲み干した。
ポケットから取り出したマルボロは、空っぽなんかじゃなくてもちろん新品でもなくて。

それを見ながらあたしはまた笑った。

「笑うなって。」
「寝てないからなんか変なのよ。気にしないで。」
「俺も寝てねぇよ。」

ふてくされたように濱本はマルボロを咥えた。

「で。今日は何であたしは有給になってるのかってことは聞いてもいいのかな？」
「ああ。それは俺が兼田部長に朝電話したの。」
濱本があたしの有給申請？
それ・・・。またいろいろな憶測が渦巻くんじゃないのか？
あたしの社会的立場危うし。
「俺が澤木さんに迷惑かけることになってしまっていますので、自分でケリつける為に時間が欲しいってね。だから今日は澤木さんに有給ください。俺が謝る為の時間をくださいって言った。」
通じてるのか・・・？それ。
あたしの不審げな表情を見て取ったか、濱本はあたしをやさしく見て。
「俺が言うのも変だけど、兼田部長は澪ちゃんの事心配してた。余計なことを言った、傷つけたと思ってたみたいだよ？」
「傷つけた？」
「澪ちゃん自覚してないみたいだけど、結構表情に出る人だし。」
そ、そうなの？
「兼田部長はあれで部下の気持ち気にする人なんだと思うよ。特に澪ちゃんはそういうの嫌かもしれないけど、唯一の女性営業だしさ。」
そう言うと、濱本はいたずらっぽく笑った。

「女だからって別に考えないでくれって言いそうだもんな、澪ちゃん。」
「そういうの嫌なんだもん。」
「でも事実だからね。それも兼田部長の思いやりだよ。」
「わかるけど・・・」

女だからって言われ方はこの時代でも確実にある。
もしもあたしが女じゃなかったら、今回の誤解だって生まれなかったわけで。
女だからなんて言わせないって思って今まで仕事をしてきていた。
だからＫＡＲＩＹＡの部長の公私混同は許せなかった。同じ女として。

でも。
あたしが女であることは紛れもない事実であることくらい、いい加減自覚してもいいのかな。

甘えるとかじゃなくて。
事実をうけとめて、じゃああたしは・・・どうする？

「兼田部長思いやりの表し方が下手なんだよ。」

濱本は窓の外に視線を移してそう呟いた。

「俺と付き合うなって言われたんでしょ？」
「知ってたの？」
「兼田部長に聞いた。電話でね。」
「そうなんだ。」
「俺トラブルメーカーだもんな。すぐ熱くなって動いちゃうし。」

何がおかしいのか濱本はくくっと笑った。

「あの人も・・・同じなんだよ。兼田部長も熱くなっちゃって、俺が澪ちゃんに迷惑かけてる事自覚してないって怒られちゃったよ。」
「え?」
「女守れないようなら男辞めちまえ、だってさ。俺、ふわふわしてるように見えるからね~。」

意外だった。
兼田部長って部下にあんまり興味ない人だと思ってた。
だから余計に・・・認められたかったのかな。あたし。

「まぁ。そういう事で今日は澪ちゃん部長公認の有給。川原課長は何も知らないけどね。」
「そか。わかった。」

すっかり珈琲も飲み干してしまい。
あたしと濱本はお互い何も言わずに外を見ていた。

何かを確かめたいような気はするけど。
面と向かって確かめる言葉もなくて。

何を確かめたいのかわからなくて、あたしは池の向こうを見ていた。

どれくらい時間が経ったのか。濱本が呟いた。

「・・・澪ちゃんってさ。」
「ん?」
「よくそういう表情をする。」
「どんな?」

「さっきまで仲良く話してたと思うのに、いきなり全く初対面みたいな・・・なんつうの？寄せ付けない感じって言うのかな。」

あたしはぼんやりと濱本を見た。

「そう？」

「うん。いつも俺の話聞いてくれて冷静でって思ってたよ。」

「そうかなぁ。」

「だからさ昨日・・・嬉しかったんだよな。」

ほえ？

「あんなに感情的な澪ちゃん見るの初めてでさ。俺に感情ぶつけてきたの初めてだったでしょ。」

「あれは・・・酔ってたし・・・。」

「そうか。澪ちゃんに踏み込むには酔わせればいいのか。」

ふふっ。濱本が笑う。

・・・そんな甘く見てんじゃねぇよ。

「酔わせてどうこうって・・・馬鹿じゃねぇ。」

「冷たいなぁ。ま。本当は感情ゆたかだって知ってるからいいけど。」

「・・・余裕見せちゃってやな奴。」

濱本はまだ笑っている。あたしを見つめながら。

でも、なんだろう。この心地いい感じ。

自分を出してもいいのかなって思える感じ。

こいつといるのは楽だ。そう思った。
楽ってことは楽しめるってことなんだ。
「・・・あのさぁ。」
のんびりとした声で濱本は言う。
「あの人たちでも恋をするのかなぁ。」
濱本の視線の先にはカフェにいた老夫婦が池を散歩していた。
恋ねぇ。
はんっ。そんな単語もあったわね。
「馬鹿ね。」
あたしは濱本を覗き込んで笑う。
「１０代の子が見ればあたしたちだって恋なんてしないように見えるわ。」
恋なんて言葉口に出す事すらないんじゃないかというような大人になってしまったあたし達だけど。
それも楽しめるならいいかな、なんて思えるから。
あたしはこいつを楽しんでみたい。
「そっか。」

こいつははじけるように笑った。

始動（後書き）

何とか完結でございます。読んでくださった方有難うございました。
しばらくは「大人のピュアな恋愛」シリーズで短編を続けたいと思
っております。

もしまた読んでみようと思って頂けましたなら。
これからもよろしくお願いいたします。

では。また。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1724q/

今更ながらのシチュエーション

2011年2月4日04時39分発行